

特集

ネット時代の図書館利用術

—横浜キャンパス図書館1階ラーニングコモンズオープン記念講演会—

森 健

2018年5月23日（水）、横浜キャンパス図書館のラーニングコモンズ開設記念として講演会を図書館1階のフリースタイルエリアにおいて開催した。

講師はジャーナリストの森健氏。森氏は著書が多数ある中で2012年『「つなみ」の子供たち』と『つなみ 被災地のこども80人の作文集』（文藝春秋）で第43回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞、『小倉昌男 祈りと経営』（小学館）で2015年第22回小学館ノンフィクション大賞受賞、2017年第1回大宅壮一メモリアル日本ノンフィクション大賞、ビジネス書大賞2017審査員特別賞を受賞した。

「ネット時代の図書館利用術」と題して講演いただいた要旨を以下にまとめた。

キーワード：図書館、インターネット、4つのスキル、取材

こんにちは。きょうは、「ネット時代の図書館利用術」という話をしたいと思います。最後にその話に持っていきたいと思っていて、僕の今までやってきた仕事を通じて図書館というか、調べるということについて話をしたいと思っています。

今日の1時間半の間で一番何を伝えたいのかを先に言っておくと、皆さんの人生というかこれからいろいろ学んだり研究したり色々な事をして社会に出ていくと思いますが、必要だと思う大事なスキルが4つあると思います。それは実は僕がやってきたようなジャーナリズムという分野が関係していて、「調べる・人に尋ねる・検証する・書いてまとめる」。この4つのスキル、能力というか、それは多分どんな世界に行っても通用することだと思います。皆さんがどんな世界、どんな業界に行こうとも必要になります。

例えば、みなさんがある商社に入社したとします。その際、「どこどこ鉱山に行って、鉱物の生産が可能か見てこい」という話になったとき、どうするでしょう。みなさんがやるべきことは、まずその鉱山が本当にあるのかをネットや文献で調べることでしょ。次に、その町に行って、本当にそれが使えるのか、人に話を聞いたりする。その後、その鉱物を持ち帰って、実際にどうなのかを調べたり、研究したりする。さらに、それを今度は上司というか、社内とか社外とかにまとめて発表したりする——というのが大まかな仕事の流れです。そのうえで4つのスキルがあればスムーズに仕事ができま

す。その意味で、4つのスキルは社会人として必要なスキルではないかと思うのです。

ジャーナリストとして在学中からやってはいますが、僕は会社の就職経験がありません。僕は、就活の本というのを書いていますが、お恥ずかしいことに、就職したことがないのです。僕は50歳ですけど、バブル世代という日本がすごく景気がいいときに学生生活を送っていて、就職しなくてもやっていけるだけの経済環境が当時日本にいっぱいありました。そのせいで、就職しなくても大丈夫だろうと思ってやってきたので、いわゆる社会人経験みたいなことを言われると、いつも困ることになります。そうはいっていても、風来坊のように生きてきたわけではなくて、いろんな雑誌の専属記者のようなことをしていました。

社員ではありませんが、ある雑誌の編集部の一人として取材活動をして何かを書いたり、まとめたり、そういうことをさんざんしてきました。僕自身は本当に不勉強で、皆さんと同じ年ごろに僕は何をやってたかというと、バイクで日本全国を走り回ったりとか、テントで川べりに寝て毎日過ごすとか、あるいは8ミリ映画というフィルムを撮って映画祭に応募したりとか、勉強らしい勉強をほぼしませんでした。誇りを持って言えるぐらい何もしてませんでした。ただ、本だけは山ほど読んで、同時にメディアに触れる機会があつて、アルバイトのような形でいわゆる雑誌のライターという、何かを取材して記事を書くということをしはじめました。

雑誌というのは、取材領域が配属で決まっている新聞と違って、人の関心が高いところに絞って取材を集中します。人員が限られているので、そうせざるをえないの

です。人の目に留まりやすい、あるいは、ここを掘ったらおもしろいだろう、ひどいだろうというところを狙って取材をする。ただ、それがどんな分野かというところ、政治・経済のような固い分野もあるし、映画や音楽、芸能やスポーツとか、やわらかいところもあります。30 年くらい前だと雑誌がすごく大きなメディアでした。ネットでいうところのコミュニティみたいな存在だったと思います。

政治だとか国際的なものを語りたかったら「朝日ジャーナル」という雑誌、もうちょっと若者の俗っぽい話だったら「週刊プレイボーイ」とか、今でもありますけど、そういうのをそれぞれの好みによって分けて買っていく。僕なんかはそういうのを、固いのややわらかいのをいろいろ使い分けながら読んで取材をしていた感じです。

僕自身がどんな仕事をしてきたのかということ、書籍で最初に出した本が 2001 年の『人体改造の世紀』という本でした。当時、2000 年にヒトゲノムプロジェクトという、日本とアメリカと欧州の共同プロジェクトで人間の遺伝情報が全部解読され、その概要版が発表されるというので、世界中で話題になりました。遺伝子治療や再生医療など生命科学が進展するだろうと期待されていました。僕はもっと踏み込んだ話があるだろうと思って、全国取材しました。

たとえば当時、九州大学では豚の肝臓に人間の遺伝子を織り込んで、豚の肝臓に人間の肝臓をつくらせるという研究をしていました。それを例えば肝臓がんなどで肝臓がおかしくなった人に移植することができないかと研究していた。あるいは 90 年代の終わりに出てきたクローン技術。クローンというのは複製技術ですけども、それをどこまで人間のほうに使っていいのかという議論がいろいろありました。そういう技術はどこまで有効なのか、そもそも人間社会に持ち込んでいいのか、そういうような倫理的な議論も取材しました。当然ながら、生命科学をやっていくと、どうしても優生学、差別的な考え方にちょっとつながるところがでできます。



また、当時取材した団体にアメリカのクライオライフ社という会社がありました。精子をいろんな条件で選んで買えるのです。例えば、金髪で青い目、肌がこの色など、もっと条件が上がると、この精子は IQ が 130 以上、もっと安いのだと幾つ以下とか、要するに外見とか知能の可能性を、精子の可能性に含んで売っている。そうしてできる子を「デザイナーベビー」という言い方を当時しました。女性はそれを選んで買え、あるいは無精子症のご夫婦でもそれを使えるというわけです。実際、日本でそうした選択で精子を調達しようとした方もいて、そういう方に話を聞きました。なぜ選択する色や選択しない色があるのか、なぜ金髪のほうが高くて黒髪は安いのか、それはどういう理屈づけなのか。そういうことを聞いていきました。

あるいは、もうちょっとシビアな話で言うと、生殖医療の話。たとえば、出生前診断。要は、胎児でお腹にある間に障害があるかどうかを判断する妊娠中の検査があるのですが、その精度が当時どんどん上がっていて、それをどこまで試していいのかという倫理的な議題がありました。障害をもつ子どもをもつ保護者たちからすると、この判定キットはつらいツールに思えます。障害をもって生まれる子を差別するのかと思えるわけです。キットを使う側からすると、それを使ってリスクを排除できるとも言える。つまり、中絶する可能性を宿している。それをどういうふうに考えたらいいのか。すごく悩ましい問題でした。

こうしたテーマで『人体改造の世紀』という連載を 1 年間、120 人ぐらい、研究者の人とか医師の人に会って話を聞きました。生命科学の論文検索をすると、日々いろんな新しい情報が出てくる。まさにコンピュータやネットの発達の中で、医療はどんどん進化していく時代でしたが、それらをどこまで使っていいかという問題が残ります。障害をもつ当事者団体の方々にも会っていきながら、どこまでやったらいいのかという議論をずっと考え続けていました。それをまとめたのが最初の本です。

その後、『天才とは何か』という本も書きました。例えば暗算世界一の珠算が得意な女の子や、国際数学オリンピックで金メダルを獲った中高生たち。あるいは小学生でゴルフ日本一の子も取材しました。運動能力は筋肉だけでなく、どう身体をコントロールするかという見地から言えば、すごく大事な能力です。しかし、このテーマの本でも、能力はいろんな形で出てきますが、能力を鍛えることが本当に幸せなのかというのを様々な見地で取材しました。また、そろばん日本一の女の子など天才児みたいな子たちの取材をしていくと、必ずしも幸せにはなっていないというのがその取材で明らかになりました。

そのあとは、『ネット王子とケータイ姫』『インターネ

ットは僕らを幸せにしたか』『グーグルアマゾン化する社会』など、ネット関係が幾つか続きます。どういうことを取材したかという、皆さんが物心ついた時はネットはあたりまえに存在していたと思いますが、その頃、つまり2000年代初期はようやくネットが広がり出したタイミングでした。そのタイミングでいろんな問題が出てきているということで、ネットや、それに伴う取材、いろんな技術を取材しました。

例えば、グーグルの問題。グーグルはいろんな検索ができますが、個人の検索はパーソナライズと個人の検索の特徴に寄せていくと、検索から出てくる情報が偏ってしまう。もうちょっと僕のほうで取材をして力を入れたのは、ネットというよりも、ネットを通じたデジタル技術の人の管理です。例えば今だと佐川急便とかヤマトとかだと、運送する自動車に通信機能がついているのは知っていますか。その車は走行情報をどんどん送ります。例えば、急発進、急ブレーキ、何キロで走って、どのルートを通って、どこで休んでいるかというのが全部本部に入ります。自動車だけでなく、会社ではロケーション（プレゼンス）管理ということもします。ICカードが入ったIDカードをもっていると、誰々が今社内のここにいる、今オンラインにいるという情報をリーダー機器が取っていく。マウスやキーボードの動作まで記録している会社もあったりします。こういう社員を監視する会社はいっぱいあって、カメラが入っていないのはトイレだけなんていう会社もあります。便利だから何でも情報収集していいという感覚は違うのではないかというのが疑問のスタート地点です。

もう一つ、僕は2000年代以降、格差の取材をたくさんしました。今だと働き方改革という問題に関係しそうですが、正社員と非正規雇用、派遣社員とか、あるいは請負という形での契約雇用とか、そういう労働問題が中心でした。当時は日雇い派遣というのがあり、1日、本当に日払いだけで払っている、そういう雇用の仕方がありました。派遣法が改正されたのは1999年12月ですが、これ以降、非正規雇用が増え、経済格差が下の人たちが増えたのです。

その後、景気は一時期よくなるのですが、2008年9月、アメリカでリーマン・ショックというのが起きて、それによって日本の消費が冷え込みました。そのときに日本の企業は新卒社員を最大28%も削り、「厳選採用」と言って非常に絞りました。皆さんのような大学生が一番被害をこうむって全然就職できませんでした。つまり、4人に1人が会社に入れない、職にあぶれるという状況になってしまった。そこで、2009年には『就活って何だ』という就活に関する本の取材をしました。

僕の関心というと、幾つか事例を出していく中で、時代時代のポイントを、流れに沿っているところもありま

すが、それが本当に役に立っているのかとか、本当にそれが人のためになっているのか。あるいは、尺度として難しいですけど、本当にそれが幸せなことなのかと問うているような取材もしてきました。

例えば、2010年に出した『脳にいい本だけを読みなさい!』という本。ばかばかしいタイトルがついていますが、これは何を取材しているかという、2000年代って脳に関する本がたくさん出ていたんですね。その脳本ブームの問題を書いた本です。

考えてみると、雑誌の取材は大体ブームが終わったあとにやることが多いです。いろんなものが騒がれた後に、本当にそれでよかったのかというふうに検証する。そういうものを僕自身も数多くしてきました。なぜかという、僕の場合はフリーランスですので、組織に入っていないということは、速報でやる態勢になっていません。日々の報道や資料等を見て、「えっ、これっておかしいんじゃない？」などそういう疑問を日々持っているんです。そういうところから、ここはちゃんとこうしたほうがいいんじゃないの、という形で出た資料を精査しながら後から攻めていく形なんです。

けれども、震災のようなときは、そうはいきません。いち早く現場に行くことが必要です。東日本大震災のときは、たびたび現地に行きましたが、この『つなみ』という作文集は子どもに声をかけて書いてもらった体験集です。当時、東日本大震災があったときに子どもの話を聞こうと思い、取り組みました。

そうして振り返ってきたのですが、すこし言っておきたいことがあります。仕事に対する構えはつねに一定ではないということです。社会に出るとよくあることですが、僕も何度か仕事をやめたいというか、変えたいと思うことがありました。

実はさっきの2000年に連載した『人体改造の世紀』を書く前は、僕は、ちょっとうつ病だったかなと思います。あまりに仕事をしたくない気持ちが強くて、起きると、「バイオハザード」というゲームばかりやって、2カ月ぐらいやり続けていました。それしかない。仕事の電話がかかってくる、忙しくて、断ってしまう。忙しくなんかないのです。お金も減っていくだけでいいこともない。

だけど、そのときになんで仕事が嫌だったかという、すごく自分がやりたくない仕事ばかりやっていたからだと思います。これは自分がやっていた方がいいのか、もうやめたほうがいいのかなんて思って、断ってゲームばかりしていった。そのうちにお金がなくなり、これは何かやらなきゃいけない。実際にはそこまでは行っていないんですが、その時に、何が一番自分に関心があったかという、さっきの生命科学や命にかかわる科学との関係だったのです。そういうニュースばかり積極的に

読んでいた。

本もいっぱい買って読んで、情報も自分からどんどん取りに行く。ゲームをしながら、それだけをしているうちに、じゃあこれを自分の仕事にしたらいいのではと思いました。それが 32～33 歳の時です。

でも、よかったなと思うのは、そういう引きこもりのような期間があつて追いつめられると、人間ってやるんだなと思ったこと。本当に自分が関心があるのは何かわかるし、本気になるんですね。「やりたいのは何だろう。この分野だったらやりたいな」と思い、そこに集中して取材をしようかなと思いました。

自分で多くの情報に触れる中で、年間で通して継続できるプランを組んで、この人に会ったらこういうことができるでしょうと、実際に「予備取材」という言い方をしますが、専門家の先生方のところにお話を聞きに行つて、こういうふうな形で考えているので改めてお話を伺えませんかという形で 10 人強に会って行って、それでプラン書というか、年間予定のこんなふうになりたいというのを作りました。それが 2000 年 4 月から連載して講談社の媒体で形になりました。

自分がやりたいことというのは、皆さんのこれからの人生の中でどこかで出てくると思います。実際、自分でもこれが契機になって、自分の主張というか、自分の関心のある仕事を注力的にできるようになりました。

今ちょうど、高田先生と一緒にやっている「ヤフーニュース特集」というウェブメディアがあります。ヤフーが独自にもっているメディアです。ここでは、自分自身が書くのはそんなに多くありませんが、同じライターと一緒に取材をやっています。

社会的に話題になったものもありとあります。例えば、所有者不明土地問題。どういう問題かという、これは被災地に行ったときにいっぱい聞いていた話ですが、被災地の土地整理が進まないという話がずっと震災後ありました。けれども、なんで進まないかなというのを役場に聞きに行くと、所有者が誰かわからない。そういう土地がいっぱいあつて、いろんな整理が進まなかった。今は全国的な話に広がっていますが、そういう問題を最初期に扱い、後続取材があつたりしました。

それから高齢者問題、たとえば雇用の話もありますし、相続、再婚するような話もあります。あるいは若い人の問題では、カフェイン中毒に係るエナジードリンクの話。あるいは女性に係ることだと、多分皆さんの世代にも関係しそうなスクールセクハラとか性被害の問題、これらは普遍性がある問題だと思いますけれども、そういうものを扱ったりしています。

テーマとして扱うのが多いのは、簡単に解決できない、中長期的な社会の課題が多いです。もともと月刊誌の仕事が多かったので、何か起きてすぐ動く速報のよう

な仕事よりも、分析したり、検証したり、じっくり人に話を聞いたりという仕事を多くしてきました。ですので、ヤフーニュース特集とはちょうどマッチするんですね。今の社会がどうなっているかを読むには、自分と言うのも変ですけども、非常にとらえやすいというか、うまく把握できるように書いているように思います。また、長文だからこそわかる問題だと思います。「ヤフーニュース特集」で検索してもらえるといろんな記事が出てきますので、時間があるときに読んでみてください。

きょうの本題の部分になりますが、僕自身は雑誌を中心に報道としてのスキルを使って今のような仕事をやってきました。そこで培ったのは、最初に申し上げたようなこの 4 つの能力です。「調べる・人に尋ねる・検証する・書いてまとめる」。冒頭にも言いましたが、これはどんな業界にも使えると思います。

そこで、調べるといったときに多分皆さんは、まずネットだと思うんです。まずグーグルでしょう。それは間違いないし、それは一番最初にやることとして多分正しいです。そうすれば、グーグルのほうに必要なニュースや論文、写真資料などを出してくれたりするかもしれない。一般的に一番クリックされるであろう情報を提供してくれるわけです。

でも、当然ながら、情報はそれだけじゃないですよ。例えば、新聞にはデータベースがあります。ある事象、ある事件について調べようと思ったら、過去の新聞や雑誌のデータベースを検索すると出てきます。

それから、書籍もあります。書籍は 1 冊にもものすごく手間がかかった調査や研究が詰まったものがあります。1 冊 1000～2000 円で入手するには安すぎるほどです。専門知識をもった人が相当な労力をかけて、書いたものが本なので、それをイチから自分で調べようとしたら、いくら時間やお金をかけてもその本の手間には敵いません。

そして、そんな本をたくさん集めたこの図書館。そう考えると、途方もない知識の宝庫であることがわかるはずです。また、ほかにも、世の中には、専門データベース、専門図書館、それから学術の世界でいったら学会の論文があります。そういったところをあるテーマに沿って調査をする。それによって自分が知りたいことに関する事象について正確な把握ができるということです。

大事なのは、ネットの検索だけではなく、あるいは書籍だけでなく、その組み合わせです。よく「ネットがない時代はどうやって調べたんですか」と聞かれることがあります。僕らの時代というか、ネットがなかった時代というのは、一番重宝したのは図書館です。それは、企業、新聞社であれば、資料室とかデータベース室とか、あるいは図書室みたいなものがあったりして、そこにこ

うやって本があったり、新聞があったり、いろんなデータがあったりしました。雑誌でいうと、雑誌専門図書館というのがあって、そこで項目別に調べることができた。

その調べた文献をもとに、今度は人に聞いていくわけです。人に尋ねること、これもまたすごく大事なことです。今の社会はネットを通じて、いつでもどこでも世界の人とコミュニケーションできます。すごく有名な人や遠い国の人でも、うまくいけば直接何かを尋ねることができる。メールやSNSのようなツールを使って尋ねることもできるし、うまくいけば、実際に会って話すことも可能です。

今はいろんなデジタルツールがあるからこそ、人に会って尋ねるという能力は前よりもっと大事になっているような気がします。あるクエスチョンについて、あるアンサーが来るというだけじゃなくて、人間のコミュニケーションというのは、そのときの温度感とか感覚という非言語的コミュニケーションがすごく大事だと思います。皆さんも友達との会話であると思うんだけど、こいつとなら話が通じる、こいつならしゃべっていいという、お互いの信頼感とか、あるいは温度感というのがあると思います。

ラインやフェイスブックメッセージを使って、ストーリーミングで話ができるのは便利ですが、リアルに直面するのに比べればやっぱり伝わりにくいところがある。なぜかという、目の前で話をしていると、こいつはどこを見ていて、どこで目をそらしたか、どういうときに首をかしげたか、全部わかります。その1個1個が情報なんです。非言語という言い方をしますけれども、体の動かし方とか、首の「うーん」というようなひねり方とか、言葉じゃない部分に言葉がある。イエス・ノーとか、いろんな答えが入っている。それをうまく伝え合うことができるのが直接対面で話をすることで、それが大事なんだろうなと思います。

取材の過程でもそういう部分があります。例えば専門性の高い情報は、ある程度聞き手がその中身をしっかり理解していないとぶつけられないことがあります。例えば、さっきのサイエンスの分野とか、法律に関係する分野とか、専門用語が入っていないと聞けない話であれば、「相手がこいつ、何もわかってないな」と思われると何も話してくれないかもしれない。でも、「ああ、こいつはよくわかっているな」というのがわかると、「じゃあ、いいよ」といって話が深くなるかもしれない。そういうのはどういうふうに投げろかで情報が掘り出せるかというのが変わってくると思います。

あるいは、どのように聞くかという聞き方もあります。例えば、相手が話しながらない、聞きづらい情報があります。そういう場合、こちらも気乗りがしない。「も

う嫌だな、これ質問するのは嫌だな」と思いながらその人のところに行って話を聞くんですが、そのときにもやもや聞いていると答えが出ないんです。そういうときは、ずばりといくしかない。最初から「すみません、これの件なんですけど、どうなんですか」と聞く。ずばり聞いたから、出てくるか、出てこないか、そのときによりますが、そうやって聞き方としてずばりとやらなくちゃいけないものもある。

書いてまとめる。調べたものを形としてまとめる。これはどの業界に行っても絶対にあります。それは公共の目的のため、メディアに携わる我々のように記事として一般向けに書くものもありますが、それだけではありません。組織などにおける特定の人、部長、課長、リーダーのようなものもそうですし、学生であれば、同じサークルのメンバーやクラスなどの友人関係もある。そういう人たちに何かを伝え、彼らに納得してもらうためにまとめる文章もあるわけです。書き方はさまざまです。そろえた素材、文献、データ、インタビュー、自分の考え……。何を選んで、どのように論理展開して伝えるか。自分が感じた感想じゃなくて、誰でも納得できるような論理をどのように構築するか。そうして、わかりやすく、興味深く、それを伝えていく。そういう作業をしていくことです。

今言った4つの作業がありますが、ではそれらの技術のベースは何になるかというと、ベースはやはり「読む」なんです。この「読む」という能力は、今でも時々すごい人がいて、膨大な資料を読んでいって、ものすごくポイントを見つけていくのがうまい人がいます。読むというのは本当に大事で、むやみに文字を追っていてもだめなんです。そこに必要なのは自分の問題意識で「何のために伝えるのか」「この文章が伝えようとしているのはどういうことか」といったフックから資料を読んでいく。そうすると自然と目に引かかって、これは役に立つかもしれない、これは飛ばしていいんだというのが判断できます。

今だと、キンドルとか電子書籍とかありますが、僕はあまり読んでいません。なぜかという、一覧性が低いからです。本だとパラパラと、あるいは急いでザッとめくることができます。これは電子書籍ではできません。クリックやスワイプをどんどんやっていかないと読めない。これは膨大な時間がかかります。進行した順に、じっくり読んでいく方法でしか読めないんです。

でも、人間の認知能力というのはすごくて、10回ぐらい本をパラパラめくだけでも、この本が何を言っているのかが何となくわかります。人間の目って0.0何秒でも理解できて把握でき、必ず意味を探そうとします。だから、さっきの膨大な本を読むというのは、特別な人

もすごい能力の人もいますが、実はけっこう誰でもできます。最初から全部はわかりませんが、繰り返してめくり読みとか、それをやるだけで、何となくその本がわかってきます。ただし、この作業は紙の本でしかできません。その意味で非常に重要です。

本は、数千年前から、要するにギリシャ哲学や中国の秦や漢や三国時代とかの時代などでも、とんでもない量の知識が残っています。それは急になくなったりしません。そして一定の専門性のある本を読めば、あるテーマについて深く掘り下げた事象を把握できる。もう少しはつきり言えば、ネットで出てくるものがすべてじゃなくて、本をじっくり読むと、そこから見えてくるものがあります。

まとめると、ネットのよさというのは、即時性や膨大な保存性、相互の情報などがあります。すぐに情報やデータが得られる。すぐにコミュニケーションできる。専門性の高い情報、学会の論文とかも含めて、そういうクラスターに接触ができ、当然共有ができる。これはネットの本当に素晴らしいところです。

一方で本のよさというのは、ある一人の著者によってまとまった知識がじっくりと得られることです。そして、ここがポイントですが、その情報はたいてい体系的に得られるということです。ネット的にはどうしても散発的だったり分散的だったりしますが、本はある著者が体系的に何かを伝えようとします。偏っている本もあったりしますが、決して無にはならず、ある塊として届けようとした塊の知識というのは、仮にちょっとした色がついたり、ちょっと曲がったりすることもあるかもしれませんが、基本的には非常に役に立ちます。

本は紙にプリントされた情報なので、ある時点における確定的な要素、確定的な事実、あるいは断面的な文章として固定されています。ネットだと、ちょっと間違えたからといって、書き直して情報更新とやれば内容が変わりますが、本はいったん出すとほぼ直らないというか、(版を重ねるときに直すこともありますけれども)基本的には直らない。その固定性というのが実は大事なことです。

買うべきか、借りるべきかといったら、何度も使いそうな本はやっぱり買ったほうがいいと思います。線を引いたり、メモしたり、書いたりできますから。だけど図書館でいろいろ見る、それだけでもいいのです。

書店とか図書館というのはなぜいいのかというと、まず物体としてそこに本がある。要するに、ここの図書館に置いてある本は、自分が今まで触れたことがない本がほとんどです。その「知らない」という把握ができることが大事だと思います。自分が「何を知っていて、何を知らない」のか。それは世界や社会を理解するときに必要な要素です。わかったつもりでも、世には知らない情

報のほうが圧倒的に多いからです。

しかも、図書館や書店のよさはもう一つあります。ある本を探しに来たと思ったら、その隣の5冊ぐらいには近縁種というか、類書がたくさんある。それをめくってみると、また知らないことを知ることができる。それだけでも一つの理解が進みます。書店とか図書館は多分そのためにあるといいと思います。お目当ての「欲しい本」は検索してアマゾンで出てきたらそれで買えば、それでもいいかもしれない。でも書店に行くと、その本が置かれているその前、上下、左右にどんな本が置かれているか。その本の周辺に似たような、しかし異なる事実のある本が置かれている。それを知ることが、広がりのある知性を養うのだと思います。

では、図書館は書店とどう違うのか。図書館は公共の利益のために設置されているので、基本的には「定番」となる本が置いてあります。時間をかけて信頼されてきた本です。一方、大きな書店、たとえば紀伊國屋とか三省堂とか丸善とかはいろんな本を置いていますが、一般的な書店は売れるものか、新しいものを置きがちになってしまう。けれども、図書館というのは完全に定番のものが多く、ある程度の基礎知識、歴史的に保証されている本、そういったものが多い。理系に関しては研究内容がどんどんアップデートされていくので、必ずしもそうとは言いきれませんが、でもやっぱり名著といわれるものもあるし、この本を読んでいけば大丈夫と図書館が保証しているものがある。

また、もう少し解説すると、専門性の高い図書館には専門的な本が詰まっています。あるいは、地域には地域の情報が詰まっています。ある地域の取材をするときには必ずその町あるいは役場の郷土史コーナーとか、あるいは市立図書館、町立図書館に行きます。そうすると、国会図書館とか本屋では置いていない資料が山ほどあります。そこに行ってみないと手に入らない情報です。それをちゃんと持てるか、目を通せるかどうかで、その後の情報の濃度が変わって来たりします。

みなさん忘れがちなのですが、ネットで出るものというのは、実は誰でも手に取れる情報です。たとえば、ここにいる皆さんが使っているグーグルで検索して出したものは、隣の人が検索しても出てきます。つまり価値が同じなのです。同じ情報が手に入るということは、共有性としては非常に便利なんですけど、情報の価値からいうと、すごく低いということです。検索してすぐに出てくる情報というのは、役に立つけど、それは情報の優位性としては低い。情報の優位性が高いというのはどういうことかということ、希少性が高い情報はあまりネットに出ていません。それはどこにあるかということ、図書館とか書店、書籍です。僕もさんざん図書館には助けられてきました。いろんな図書館に足を運んで、いろんな知

〔当日のアンケートから抜粋〕

「Q：講師の森氏へ一言」

- ・本を読むことが、物事の本質を掴む力が身につくということが分かりました。
- ・図書館では、分野毎の定番・マストの本が置いてあるため知識を得るには素晴らしい場所であるということがわかりました。
- ・森さんが取材を行って書かれた記事1つ1つにとっても興味を持ちました。
- ・本を読むことの重要性について自分の考えを改めることができました。本日はありがとうございました
- ・「体系的」という言葉で本のまとまりかたを話されていて、とても共感しました。
- ・森さんのお話を参考にこれから本を積極的に読んでいきたいと思えます
- ・今までネットで情報を得ていたが、図書館を利用しようと思いました。
- ・講演を聞いて、自分にとって足りないものを教えてくれたようなそんなお話でした。これからは本を読んでいこうと思います。ありがとうございました
- ・ジャーナリストとしての活動についての話が聴けて面白かったです
- ・ネットよりも本の方がまとまった知識を得られるため本の方が重要ということがわかりました。
とても興味深い内容で面白かったです。論文を書く際に参考にさせていただきます。
- ・ネット時代における図書館の立ち位置が分かりました

識を得てきました。なぜかといったら、繰り返しますが、専門性が高い情報が多いし、それにはお金がかかっていくからです。なかなか無料で出していない。当たり前のことですよ。お金も手間もかかったものがそこにある。それを入手できるかどうかでほかの人との情報の優位性というのは随分変わります。物理的にそれを自分が知っているか、知らないか、それが自分の知の座標軸につながると思います。

もう一つ、僕が深めてほしいというか、先に紹介した「調べる、読む、検証する、まとめる」という4つのスキルを持ちながら、皆さんに持ってほしいのは「これは本当だろうか」「これでいいのかな」と、つねに現状や前提に対する疑問を持つということです。

あまり変化のないルーティンの仕事であっても、よく見ると1個1個の作業にこれが本当なのか、これでいいのだろうかという問いをもつ。さらに、こうしたらうまくいくんじゃないか、こうあるべきじゃないかという仮説を持ったり、それに対して疑義をもったりしてい

く。そういう姿勢を持つことで人生や日々の社会生活に対して、何か変化が起きやすいのではないのかなと思うのです。

何でもかんでも疑ってかかったら、それはよくないと思います。でも、7割ぐらい信用して、3割ぐらい疑うとか、それぐらいの信頼と疑問のバランスをもった姿勢で人や社会に接していくと、最終的には自分を変えていくことができると思うのです。社会を変えていくというのは、なかなか大変ですが、それを目指す前に、まず自分を変えていく能力につなげる。そういうことができるのであれば、社会の実相を知ったり、その先にさらに社会を変えたりする可能性、そういうチャンスが出てくるのかもしれないと思うし、そういうふうな姿勢を持つことで多少なりとも自分が変わったら、いい人生になるのではないかと思います。

きょうはそんな話をお伝えしました。

以上です。ありがとうございました。

【講師略歴】

森 健（もり・けん）

ジャーナリスト、専修大学非常勤講師。1968年1月、東京都生まれ。神奈川県相模原市で育つ。

大学在学中の1990年からライター活動をはじめ、科学雑誌、経済誌、総合誌で専属記者を経て、フリーランスに。

2019年現在、「ヤフーニュース特集」でデスクを務めるほか、「読売新聞」読書委員、「毎日新聞」連載「森健の現代を見る」、「朝日新聞」月刊「Journalism」アドバイザリー委員、「サンデー毎日」で連載「季節の人たち」、など。

主な著書）

『ビッグデータ社会の希望と憂鬱』（河出文庫）、

『つなみ 被災地の子どもたちの作文集完全版』（文藝春秋）、

『「つなみ」の子どもたち』（文藝春秋）、

『勤めないという生き方』（メディアファクトリー）、

『ぼくらの就活戦記 難関企業内定者40人の証言』（文春新書）、

『脳にいい本だけを読みなさい——「脳の本」数千冊の結論』（光文社）、

『就活って何だ——人事部長から学生へ』（文春新書）、

『グーグル・アマゾン化する社会』（光文社新書）、

『インターネットは「僕ら」を幸せにしたか？——情報化がもたらした「リスクヘッジ社会」の行方』（アスペクト）、

『ネット王子とケータイ姫——悲劇を防ぐための知恵』（※香山リカさんと共著）（中公新書ラクレ）、

『社長をだせ！ってまたきたか！』（宝島社）、

『天才とはなにか？』（数研出版）、

『人体改造の世紀』（講談社ブルーバックス）